

# 汚姉妹

呪われた少女

作・小佐部明広

【登場人物】

ハル …… おうちがない女の子。

アカリ …… ハルの妹。

モモ …… 絵がへたな絵本かき。

ケイ …… うまくしゃべれない男。

ヤナギ …… お金持ち。

ユウタ …… ヤナギの息子。

ミーコ …… ヤナギの娘。

第一幕

1

音楽が鳴っている。

舞台上にいる人々。

背中を向けて泣いている女の子。

歌っている女の子。

眠っている男とその娘。

絵を描いている男の子。

泣いている女の子を見ている女。

それは、一枚の絵のようである。

その絵を見ている男、ケイ。

ケイ この絵、目の見えない人が描いたんです。

僕、この絵の前に立つと……涙が出てくるんです。

全員去り、絵本を持った女、モモだけが残る。

客席に語りかける。

モモ 『森のモモちゃん』のはじまりはじまり。

……はくしゅ。

客席が拍手するまで、拍手を要求する。

モモ、絵本を開く。

モモ 「大きな大きな森に、モモちゃんという、

それはそれはかわいい女の子がいました。」

(自分を指さして客席にアピール)

「それはそれは、とてもたいそう、

びっくりするくらいかわいい女の子がいました。」

(客席にアピール)……もうやめます。

「モモちゃんは絵本を描くのが大好きでしたが、

お父さんに、

絵本なんか描かずに働きなさい、と言われました。」

うちは、びっくりするくらい貧乏だったんです。

「どうしても絵本を描きたかったモモちゃんは、

とうとう家出をすることにしました。

でも、かわいいかわいいモモちゃんは、」

(客席を見る)

「かわいいかわいいモモちゃんは、

それはそれは臆病者だったので、

びくびくしながら森の中を歩いていました。

そんなときです。

モモちゃんは、ある女の子に出会いました。」

身なりの汚い女の子・アカリ、食パンを食べながらやってくる。

モモに気づいて、警戒する。

モモも、アカリを警戒する。

アカリ、警戒しながらも食パンを食べる。

モモ あ、

にらみ合うふたり。

モモ (威嚇してみる) わ!

アカリ ああ!

モモ あ、ごめん。

アカリ、警戒しながらも、食パンを食べる。

モモ あ、あの、その、ええと、

アカリ おねえちゃーん!

モモ (大声にびっくりして) わ!

アカリ おねえちゃーん!

モモ、警戒する。

アカリの姉・ハルがやってくる。

ハルの身なりも汚い。

ハルも食パンを食べている。

ハルとアカリ、モモを見ながら、並んで食パンを食べている。

ハル よ!

モモ ……よ!

ハル 誰だ?

モモ あ、ええと、

モモのお腹の音が鳴る。

モモ あ、

モモ、お腹を押さえて、ハルたちの食パンを見つめる。

ハルとアカリ、食パンを食べる。

ハル、新しい食パンを取り出して、

ハル 食えよ。

モモ いいの?

ハル しょうがない。

モモ、パンを食べる。

ハルとアカリ、食パンを食べる。

食パンを黙々と食べる3人。

アカリ で、誰ですか?

モモ あ、ええと、私は、

ハル 海だ!

モモ ……ううん、私の名前はウミじゃなくて、

ハル 海に行くぞ!

モモ ……ええと、私の名前は、  
ハル 海に行くぞ！  
モモ わかった。

……そんなこんなで私は、  
謎のパンの女の子たちと海へ行くことになりました。

波の音が聞こえてくる。

モモ わあ、きれい。

ハル お母さんとよく来たんだ。

モモ そうなんだ、

お母さんは今おうち？

アカリ、モモを見る。

ハル お母さんはお空にいるんだ。

ずっとあたしたちのこと見守ってるんだ。

モモ あ……ごめん。

ハル お空に行くことはいいことだぞ。

あたしもいつかお空に行つて、

お母さんに会いに行くんだ。

モモ うん。

ハル で、お前誰だ？

モモ あ、ええと、私は、

ハル あたしはハル！ よろしくな！

モモ あ、うん、よろしく。

ハル こいつはアカリン！

あたしの妹！

人見知りだけど悪いやつじゃないぞ！

アカリ アカリです。

ハル で、お前誰だ？

モモ あの、私、モモっていうの。

ハル へー。変な名前だな。

モモ、しゅんとする。

アカリ ああ、しゅんとしないでください。

ハル モモは何しに来たんだ？

モモ ……私、家出してきたんだ。

アカリ 家出？

モモ あの、絵本が描きたくて。

でも、お父さんが許してくれなくて。

ハル 絵本好き！

モモ え、ほんとに？

アカリ (モモの持っている絵本を見て) それ……、

モモ そう、私が描いた絵本！

ハル 見てあげようか？

モモ 読んで読んで！

ハル、絵本を開いて、少しして閉じる。

モモ え、次のページあるよ。

アカリ モモさんって、

モモ なに？

ハル 絵ヘタだな！

モモ あー、私ってやっぱり絵ヘタなの……？（しゃがみこむ）

アカリ それでお父さん反対したんじゃ……。

モモ 違うもん！

お母さんは私の絵本面白いって言ってくれたもん！

アカリ ごめんなさい……。

モモ 私なんて取り柄もないし、友達もないし、

臆病だし、役に立たないし、

でも絵本だけは褒めてくれたんだもん！

私には絵本しかないんだもん！

アカリ 泣かないでくださいモモさん……。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ ……。

ハル 泣きやんだか？

モモ なにその歌？

ハル 魔法の歌。

これを歌うと、みんな笑顔になるんだ。

お母さんが教えてくれた。

モモ （泣きながらも笑顔になって）素敵な歌だね。

ハル 笑顔になった。

モモ ハルちゃんは魔法使いだね。

ハル 今さら気づいたのか。

（腕にしているボロボロの紐でできた腕輪を見せる）

これ、お母さんがあたしにつくってくれた魔法の腕輪だ。

これをつけてるといいことがある。

モモ すごいね。

ハル まあな。

モモ ねえハルちゃん、

私、すぐ泣くし、絵もヘタだけど、

……ううん、なんでもない。

アカリ え、なんですか？

モモ なんでもない。

アカリ 言ってくださいよ。

モモ だって、なに言ってんだよって、思われるかもしれないから。

ハル 言いたいことは言ったほうがいいぞ！

モモ あの……、

よかったら、私と友達になってくれませんか！

アカリ ……。

ハル なに言ってんだよ。

モモ ……ほらね。

ハル もう友達だろ。

モモ え……？

アカリ （笑って）よろしくお願いします。モモさん。

モモ、泣いてしまっ。

アカリ あ、モモさん？

ハル 悲しいのか？

モモ ううん、悲しい涙じゃないよ。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ、笑う。

みんな ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

音楽。

2

モモが語る。

ハルとアカリは遊んでいる。

モモ こうして私は、

ハルちゃんとアカリちゃんと友達になりました。

ハルちゃんたちにはおうちがなかったの、

いつも木の下で眠っているそうです。

ハルちゃんはどこからともなくパンを出してくれるので、

食べ物には困りませんでした。

アカリちゃんさえ、

ハルちゃんがどこからパンを持ってきているのか

知らなかったの、

ハルちゃんは本当に魔法使いなのかもしれないな、

と思いました。

ユウタがやってくる。  
片目に眼帯をしている。

ユウタ おはよう、ハルちゃん。

ハル わ、ユウタ！

アカリ おはようございます！

モモ この人はユウタくんです。

よくハルちゃんのとこに遊びに来ているそうです。

うまれつき片目が見えないそうなのですが、

絵を描くのが好きで、

将来は画家になりたいと言っていました。

ユウタのスケッチブックを見ているハルとアカリ。

アカリ ユウタさんって本当に絵うまいですね。

ユウタ ありがとう。

モモ 私の予想が正しければ、

たぶんアカリちゃんはユウタクんのことが、

……とても気になっています。

しっかりものだけど、

そういうところはかわいいなと思いました。

ハル ユウタ、モモは絵がヘタだから、

かわりに描いてあげなよ。

モモ 言い方がまっすぐだね。

ユウタ 絵描いてるんですか？

モモ 絵本描いてるんだけど……。

ユウタ 絵本。素敵ですね。  
モモ ほんと？

実はこれから新しいのを描こうと思ってるんだけど。

ユウタ 僕でよければ、なにか手伝いますから。

モモ ありがとう。

アカリ ユウタさん、あの、よかったら、

今日は私を描いてくれませんか？

ユウタ え？

モモ 描いてあげなよ。

ユウタ うん、いいよ。

そうだ、ハルちゃんも。

ハル なんだ？

ユウタ 今日は二人を描くよ。

ハル おう、ほんとか！

ユウタ そこに並んで。

ハル おう！

ユウタ、スケッチブックを広げて描き始める。

ハル なあ、ユウタはどうして片目なのに絵がうまいんだ？

アカリ お姉ちゃん。

ユウタ ……ハルちゃん、

僕は片目に生まれてきてよかったと思ってるよ。

だってそれって、僕にはほかの人と

違うように世界が見えてるってことだろ。

だから僕は、僕にしか描けない絵を

描くことができるはずなんだ。

ハル ふーん。

アカリ それ、素敵ですね。

ユウタ ありがとう。

絵を描いているユウタ。

ユウタ ハルちゃんを見ているとお母さんを思い出すよ。

ハル そうなのか！

アカリ 「思い出す」って？

ユウタ ある日、急にいなくなっちゃったんだ。

アカリ え？

ユウタ きっとお父さんに嫌気がさしたんだ。

とつても明るくて優しい人だった。

ハル いいやつだな！

ユウタ 顔も似てる。

お母さんとハルちゃんはそっくりだ。

ハルちゃんも明るくて優しい。

ハル まあな！

ユウタ ハルちゃんって、目がきれいだよね。

ハル ほんとか！

ユウタ ハルちゃんの目を見ると、なんだか嬉しくなる。

ハル そうか、よかったな！

アカリ ハルから離れる。



ユウタ どうしたの？

アカリ 私、やっぱりいいです。

ユウタ いいの？

アカリ はい、お姉ちゃんだけ描いててください。

ユウタ そう？

ハル まかせとけ！

アカリは去って行ってしまふ。

モモ ちょっともう、鈍感なんだから！

ユウタ え？

モモ 行くよ！

ユウタ 僕ですか？

ハル あたしも行く！

モモ ハルちゃんはここで待ってて。

ハル なんで？

モモ 描いてもらうポーズ考えてるの。

ハル わかった！

モモ、ユウタの手を引いて、アカリの去った方に向かっていく。

ハル、いろんなポーズを考えてみる。

腕輪を外して、手に持ったようなポーズも考えてみる。

物陰から、ケイがこっそり現れる。

ケイ おう。

ハル わ！ 誰だ？

ケイ だ、だ誰でも、い、い、いいだろう。

来い！

ハル わあ。

ケイ、ハルの手を引っ張り去っていく。

ハルは腕輪を落としていく。

モモとアカリ、ユウタが戻ってくる。

モモが戻ってきたながらアカリに話している。

モモ ほーら、機嫌直して。

ユウタ くんに絵かいてもらおう。

ユウタ なんかごめん。

アカリ もういいです。

モモ あれ？

みんな、ハルがないのに気づく。

モモ ハルちゃん？ ハルちゃん？

どこ行っただらう？

アカリ バッタでも見つけて追いかけてるんですよ。

いつもそうなんですお姉ちゃんは。

すぐ戻ってきますよ。

モモ だといんだけど。

あれ？

モモ、ハルの腕輪を見つけて、捨てる。

モモ これって。

アカリ お母さんがお姉ちゃんにあげた腕輪……。

モモ ……。

アカリ モモさん？

モモ ……ちよっと、さがしてみよう。

私、海岸に行ってみる。

ユウタ あ、でも、僕そろそろ帰らないと。

モモ わかった。

アカリちゃんもどっかさがしてみよう。

アカリ はい。

モモ 見つかったら、またここに集まろう。

ユウタくん、またね。

ユウタ あ、はい。

モモは去っていく。

ユウタ じゃあ。

アカリ ユウタさん。

ユウタ なに？

アカリ ……ううん、なんでもありません。

ユウタ うん。

アカリ、去っていく。

ユウタも去っていく。

森の奥。

ケイとハルがやってくる。

ケイ く、くくくそ、どど、どこだ、こ、ここは。

ハル お前、道にまよったのか？

ケイ ち、ち違う、よよ寄り道して、してる、だ、だけだ。

ハル ふうん。

雨が降ってくる。

ハル あ。

ケイ あ、ああ、くそ。ここ、こんなときに。

あ、あ、あそ、そこにほら、洞穴が、あ、ある。

あ、あ、あま、雨宿りだ。

ハルとケイ、去っていく。

アカリたちがいた場所。

アカリとモモが戻ってくる。

雨は降り続けている。

モモ いた？

アカリ ううん。

モモ どこ行ったんだろう。

アカリ、くしゃみする。

モモ 大丈夫？

アカリ はい。(鼻水をすする)

風邪ひいたかもしれない……。

モモ とりあえずこの木の陰で雨宿りしよう。

アカリ はい。(鼻水をすする)

モモ ……どうしよう、

もし悪い人にさらわれて、

いたぶられたりしたら……。

そしたら、私のせいだ。

ハルちゃんだけ置いてったから。

アカリ 考えすぎです。

モモ ……やっぱり、もう少しさがしてみる。

アカリ 戻ってきますよ。

モモ でも、もう少しだけ、

アカリ 行かないでください。(鼻水をすする)

モモ ……。

アカリ そこまでしなくていいです。

モモ でも……友達だから。

アカリ 私とモモさんは友達じゃないんですか？

モモは黙ってしまいが、少ししてアカリを抱きしめて、

モモ 友達だよ。

アカリ ……。

モモ ……ごめん、でも少しだけさがしてみる。

アカリ、行こうとするモモの腕をつかむ。

モモ、ゆっくりアカリの手を離して、

モモ すぐ戻るから。

モモ、去っていく。

洞穴の中。

ハルとケイが雨宿りしている。

ケイ い、い、いつやむんだこの雨は。

ハル なあ、お前誰だ？

ケイ お、お、俺は、ケ、ケケイ。

ハル ケケイ？

ケイ ち、ち違う、ケ、ケイ。

ハル ケケイ？

ケイ ば、ば、ばかにするな。

お、お、俺はつつ強いんだ。

ハル あたしはハル。

よろしくな。

ケイ おおお前は、きよきよ今日から、

おお俺のめめ召使いだ。

ゆ、ゆ、言うことをきかないとなな殴ってやる。

ハル 召使いつてなにするんだ？

ケイ おお俺の世話をしたり、

よよ夜は、

おおお前のかか体を、

もももてあそんでやる。

ハル 遊んでくれるのか？

ケイ、ハルの腕をつかんで、拳をふりあげる。

ケイ ふ、ふ、ふざけるのもいいいい加減にしろ。

ハル なんだ、じゃんけんするのか？

ケイ くく、くそ！

ケイ、ハルの頬を殴る。

ハル、倒れる。

ケイ おお思い知ったか。

おお俺はつつ強いんだ。

ハル あはは、あはははは！

ケイ ……なんだ、なななにをわわ笑ってる？

ハル 生きてるって楽しいな。

たたかれたり、雨が降ったり、それでも笑ったり、  
楽しいな！

ケイ な、な、なにを言ってるんだ。

ハル (立ち上がって、違う方の頬を指差して) こっちもたたくか？

ケイ なななんなんだ、おおお前は！

ちちちくしょう、

おお俺がこここんなしゃ、しゃべ、しゃべり方だからっ

て、

ばばばかにしゃがって！

ケイ、また拳をふりあげるが、

ハルは笑う。

ハル あはは、あははは！

ケイ くそ、おお俺はばばかじゃねえぞ！

うう、うう、

ケイ、少し泣き出す。

それを見てハルは歌いだす。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ケイ ばばばかばかしい、

おおお前にはわわわわからない、

ハル お母さんが言った。

笑えば楽しいし、泣いたら悲しいぞ。

ケイ わわ笑えるわけがない。

みみみんなおお俺をばばかにして、  
だだ誰もおお俺のこ、ことなんか、  
みみ見てく、くれない、

ハル (じっとケイをみて) 見てるぞ。

ケイ ばばなかにすするな、

めめ 召使いの、く、くせに、

ハル 召使いはやだ。

友達だ！

ケイ と、とと、とともだち？

やややめろ、ししし信じないぞ。

ハル ♪泣いちやダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ケイ ……。

ハル 歌うぞ。

ケイ ……。

ハル ♪泣いちやダメさ いつも笑って

二人 ♪楽しく生きよう

ハル もう一回。

二人 ♪泣いちやダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ハル 楽しく生きよう。

ケイ 楽しく生きよう……。あれ？

ハル どうした？

ケイ 楽しく生きよう。楽しく生きよう。

ハル そうだ！

ケイ しゃべれる……。

雨がやむ。

ハル あ！

陽のさす方を見て、

ハル 晴れたな。

ケイ 晴れた。

モモの声がきこえる。

モモの声 ハルちゃん、ハルちゃん、

ハル モモの声だ！

ハル、行こうとする。

ケイ 待って。

ハル ？

ケイ 俺たち、友達なのか？

ハル さっき言っただろ。

モモがやってくる。

モモ あ、ハルちゃん、いた！

ハル よ！

モモ、ハルを抱きしめる。

モモ なにしてたの……。心配させないでよ……。

ハル おっさんと遊んでた。

モモ おっさん？

モモ、ケイに気づいて、身構える。

ハル さつき、友達になったんだ。

モモ (ケイに) ……あの、そうなんですか？

ケイ そ、そ、そうなんだ、

(喋り方が元に戻っていて) あ、あれ？

ハル モモはあのおっさんと友達になるか？

モモ え？

ケイ ど、ど、どうも、

モモ あ、あ、どうも、モモっていいいます、

よろしく願います。

ハル このおっさんはケケイだ。

ケイ ケケイじゃなくて、ケイだよ。

あ。

モモ ハルちゃん、アカリちゃんが風邪ひいたみたいで。

ハル そっか！

じゃあ帰るぞケイ！

ケイ うん。

三人はアカリのもとへ。

アカリ おかえり……。 (ケイを見て警戒して) ……誰？

ハル こいつはケイだ！

さつき友達になった！

アカリ アカリです。

ケイ どどうも。

アカリ (鼻水をすする)

ハル よし歌うぞアカリン。

アカリ え？

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って

モモとケイも歌う。

三人 ♪楽しく生きよう

ハル ほら歌うぞ。

アカリも歌う。

四人 ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ハル 元気出たか？

アカリ 治ったかも。

モモ 本当に魔法使いみたい。

ハル でも元気なさそうだぞ。

アカリ そんなことないよ。

ハル、また歌いだす。

ハル ♪泣いちゃダメさ

四人 ♪いつも笑って 楽しく生きよう

第二幕

3

季節は変わり、少しだけ寒くなってきた。

ハル、アカリ、ケイ、ユウタが食パンを食べている。

ユウタは途中から絵を描き始める。

モモが絵本を持って語り始める。

モモ それから少し時間が経って、

森も少しだけ寒くなってきました。

ケイもすっかり打ち解けて、

私たちとはふつうにしゃべれるようになりました。

私はというと、

「森のモモちゃん」を描くのはやめて、

そのかわりに、

「森のハルちゃん」という絵本を描くことにしました。

絵はユウタくんが描いてくれることになりました。

ケイ じゃあお母さんはいつも空から

二人のことを見守ってくれてるんだね。

ハル そうなんだ。

モモ (アカリに) お母さんってどんな人だったの？

アカリ とっても優しい人でした。

ハル アカリンには優しくなかったけど、

あたしはお姉ちゃんだからしっかりしなさいって

よく怒られてたぞ。

アカリンが泣いてたら甘やかすのに、

あたしが泣いたらメチャクチャ怒られたからな！

モモ そんなに怒られたの？

ハル まあな！ 鬼みたいだったぞ！

ケイ ハルちゃんも泣くことあるんだね。

ハル 昔な！

ユウタ (絵を描き終えて) モモさん、

こういう感じの絵でどうですか？

モモ わー素敵。

ハル さすがユウタだな！

ケイ これハルちゃんか？

ユウタ はい。

ケイ ちよっとかわいく描き過ぎじゃないか？

ユウタ そうですか？

ケイ あと、俺はもうちよっとかっこいいと思うんだけど。

ユウタ いや、こんな感じですよ。

ハル アカリンはいないのか！

ユウタ うん、このページには必要ないかなと思って。

ハル そうか！

モモ お金もおうちもないけれど、

私たちは毎日、笑いながらパンを食べて暮らしてしました。

そう、あの人が来るまでは。

ハル あ、

ヤナギとミーコが現れる。

ミーコは手袋をしている。

ヤナギ やあ、久しぶりだねハルちゃん。

ミーコ うわ、くっさ。

ハル おっさんだ！

チヨコくれよ！

ヤナギ はいはい。

ハル 「はい」は一回。

ヤナギ はい。(チヨコをあげる)

ハル よし、帰っていいぞ。

ヤナギ まあ待ってくれよ。

この人たちにおじさんを紹介してくれよ。

ハル このおっさんはユウタのお父さんなんだ！

超金持ちだぞ！ よろしくな！

ヤナギ そう、俺の名前はヤナギだ。

覚えておいてくれ。

ミーコ ユウタの妹のミーコです。

モモ はじめまして、モモです。

ケイ ケ、ケ、ケケイです。

ユウタ なにしに来たんだよ。

ヤナギ なにしにすることはないだろう。

遊びに来たんだよ。

ユウタ 帰れよ。



ヤナギ 反抗期だねえユウタくんは。

そんなにこいつらと一緒にいるのがいいのかい？

ユウタ ウチにいるよりずっといいよ。

ヤナギ 絵ばかり描いてないで、

たまには勉強したらどうだい？

そうだ、今日はもうおうちに帰って勉強しよう。

じゃなきや夕飯抜きだぞ。

ユウタ ……わかったよ。

ハル またな！ ユウタ！

ユウタ うん、またね、ハルちゃん。

モモ またね。

ケイ またな。

アカリ また……。

ユウタは去っていく。

ハル (ミーコが手袋をしているのを見て) ミーコは寒いのか？

ミーコ ミーコ、汚いものには触りたくないの。

ミーコはきれいだから。

ハル へえ！

じゃああたしは汚いから、

ミーコに触っちゃだめだな。

ミーコ 手袋の上からなら大丈夫だよ。

ハル ほんと？ じゃあ握手。

ミーコとハル、握手。

ハル ウンチついてるけど大丈夫か？

ミーコ きいやあぁー！

ミーコ、握手した手袋を地面に叩きつける。  
新しい手袋を取り出し手にはめる。

新しい手袋を取り出し手にはめる。

ヤナギ どうしてウンチがついてるんだい？

ハル あっちの方でウンチしてたんだけど、

ふくものなかった。

ヤナギ ハルちゃん、

そんな人生はかわいそうだと思わないかい？

ハル 人生は楽しいぞ！

ヤナギ そうか。

キミたちにひとつききたいんだが、

人生でいちばん大切なものって、

いったいなにかわかるかな？

誰もなにも言わない。

ハル これだ！ (腕輪を見せる)

ヤナギ なんだい、これは？

ハル お母さんからもらった魔法の腕輪だ！

これを持っているといいことがあるぞ！

ヤナギ (吹き出す) くくく、あはは、

こりゃあいい！

最高だよハルちゃん！

あはははは！

ハル あはははは！

あはははは！

ハルが、みんなにも笑ってみせてくるので、みんなも笑う。

みんな あはははは！ あはははは！

あはははは！ あはははは！

ヤナギ ハルちゃん、どうやらキミは

人生というものがよくわかっていないようだね。

ハル あたしバカだからな！

ヤナギ いいかいハルちゃん、

これはみんな知っていることだから

よく覚えておいてほしいんだけどね、

人生でいちばん大切なものは金なんだよ。

ハル なんだ？

ヤナギ 金があればなんでも手に入るし、

金があればなんでも思い通りになるんだ。

つまり、幸せっていうのは、

金を持っているってことなのさ。

ハル へー。

ケイ そ、そ、そんなのはウソだ。

ヤナギ ウソ？ どこが？

ケイ か、か、か金がなくても、

し、しし幸せだ。

ヤナギ それは金持ちになれなかった人の言い訳だろう？

本当は金持ちになりたいのになれないから、

自分に嘘をついて納得しようとしているだけさ。

モモ そんなことありません！

ヤナギ ……なんだい？

モモ ……お金で友達はいえませんが。

ヤナギ 買えるよ。

なあ、ミーコ？

ミーコ ミーコ、お友達たくさんいるよ。

ミーコ、お金持ちだから。

モモ それは友達じゃないです。

ヤナギ なんの取り柄もない人間ほど友達とか愛とかいう

不確かなものを大切にするんだよ。

それくらいしかすがれるものがないからね。

違うかい、ケイ？

ケイ ち、ち、ち、

ヤナギ 違うないんだよ。

キミたちは金もなければ取り柄もない。

いわばなんの役にも立たないゴミなんだよ。

ケイ お、お、お前！

ケイ、ヤナギに殴りかかるが、ヤナギに腕をつかまれとめられる。

ヤナギ バカは言葉で勝てないと暴力で勝とうとする。

ヤナギ、ケイを振り払う。

ヤナギ お金は裏切らないが、

友達も愛も、すぐに裏切るよ。

キミたちはまだわかってないみたいだね？

なあ、アカリちゃん？

アカリ ……。

ハル みんなは、裏切らないぞ！

友達だからな！

ヤナギ ……今のははじめな者どうしで

お友達ごっこをやっているといい。

いつまで続くか、楽しみだね。

モモ 行こう。

アカリ ……。

モモ 行くよ。

モモ、去っていく。

ハル じゃあな！

みんな去っていく。

ヤナギ ……そう、友達も愛も裏切るんだよ。

ヤナギは昔のことを思い出す。

音楽。

舞台上にはヤナギとミーコ。

ミーコ むかしむかしあるところに、

ヤナギという男の子がいました。

ヤナギのおうちは貧乏でした。

ヤナギ ママ、お腹がすいたよ。

ミーコ「ごめんね、食べるものがないの。」

ヤナギ お腹すいたよ。

ミーコ「食べるものがないのよ。」

ヤナギ お腹すいた。

ミーコ「ないのよ！」

ヤナギ お腹すいた……。

ミーコ「あなたはいっぱい勉強して、お金持ちになるのよ。

貧乏って、かわいそうっていう意味なのよ。

幸せって、お金があるっていうことなの。」

ヤナギ ……わかんない。

ミーコ「なんでわかんないのよ！」

ヤナギ、殴られる。

ミーコ「あなたは幸せになるのよ。

絶対に。

ママとの約束よ。

♪ゆびきりげんまん嘘ついたら

げんこつ百発あげる 指切った

約束よ。」

ヤナギ げんこつ嫌だ……。

ミーコ 「約束だからね。」

ヤナギ うん……。

立ち尽くしている、ヤナギ。

ミーコ パパ？

ヤナギ ……。

ミーコ パパ？

ヤナギが気づくと、そこはヤナギの家。

ヤナギ ああ、どうしたミーコ？

ミーコ 考えごと？

ヤナギ いや、昔のことを思い出していただけさ。

さあ、出かけよう。

ミーコ 始まるの？

ヤナギ そうさ。

探偵を雇ってやつらのことは調べ尽くした。

ゲームスタートだ。

ミーコ やったー。

ヤナギ パパの力を見せつけてやるよ。

よく見ててくれ。

パパとあのクソガキ、どっちが勝つか。

ミーコ 二度と立ち上がれないくらいコテンパンにしてね。

4

森の夜。

アカリがいる。

ひとりで歌っている。

アカリ ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ヤナギ、拍手する。

アカリ、ヤナギに気づく。

ヤナギ やあ、アカリちゃん。

ミーコ どうも。

アカリ あ。

ヤナギ、チョコレートを出す。

ヤナギ チョコレート。

アカリ あ、ありがとうございます。

ヤナギ ほかのみんなはどうしたのかな。

アカリ 寝てると思います。

ヤナギ いつも夜になると歌ってるよね。

アカリ ……どうして知ってるんですか？

ヤナギ おじさんはアカリちゃんの歌が大好きなんだ。

こうやって何度もこっさりききに來るくらいね。

アカリ そうなんですか……。

ヤナギ アカリちゃんの素敵な歌声を

もっとたくさんの人にきいてもらえないものかなあ。

なあミーコ？

ミーコ ミーコもそう思う。

ヤナギ そうだ。

アカリちゃん、街に來ないかい？

アカリちゃんの歌声を街のみんなにきいてもらおうんだ

よ。

アカリ え……。

ヤナギ どうだろう？

ミーコ すごーい、街のみんなも大喜びだよ。

アカリ でも……。

ヤナギ 大丈夫、なにも心配いらぬよ。

おじさんは有名な歌手とお友達なんだけどね、

その人の家に泊めてもらえるように頼んでみるよ。

きれいな服も用意するし、

ほしいものがあればなんでも買ってあげるよ。

アカリ ……でも、お姉ちゃんが……、

ヤナギ ああ、ハルちゃんのことか。

あのコは実にずる賢い人間だね。

アカリ え？

ヤナギ キミは気づいていないかもしれないが、

キミは、ハルちゃんに利用されているんだよ。

アカリ どういうことですか？

ヤナギ キミはお姉ちゃんの引き立て役に過ぎないんだよ。

ネクラのキミと一緒にいれば、

ハルちゃんは魅力的に見える。

お姉ちゃんはそのことがわかっていて、

ずっとキミと一緒にいるんだよ。

ミーコ ひどくい。

ヤナギ ハルちゃんはみんなから必要とされているね。

でもキミはどうだろう。

アカリ ……。

ヤナギ (アカリの肩に手をのせて) おじさんは、

アカリちゃんのことを必要としてるよ。

そして、街のみんなも。

どうだろう？

アカリ ……考えさせてください。

ヤナギ よし、じゃあみんなが起きてきたらきいてみよう。

それでいいだろう。

アカリ ……はい。

ミーコ パパは、どれだけアカリちゃんの歌声が素晴らしいか、

どれだけ街の人がアカリちゃんの歌声を

必要としているかを熱心に話しました。

朝になってみんなが起きてきました。

パパは、

みんなを集めて、みんなの前でこう言いました。

ハル、モモ、ケイが集まっている。

ヤナギ みんな、アカリちゃんは歌をうたうために

街に行くことになったよ。

アカリ え？

ヤナギ そうだよね、アカリちゃん？

アカリ ええと、

ケイ は、は、はあ？

モモ (アカリに) どういうこと？

ヤナギ アカリちゃんはたくさんの人に必要とされているんだ。

だから街に行ってみんなに歌声を届けるんだよ。

もうこの森には戻ってこないかもしれない。

ケイ な、な、なに、

ハル そうなのか、アカリン？

ヤナギ そうさ。なあ？ アカリちゃん。

アカリ ……ごめんね、お姉ちゃん。

(決心して) 私のこと必要としてくれる人がいるんだ。

もう、みんなとは会えないかもしれない。

ハル、ニコっと笑う。

ハル そうか、頑張れよ！ 応援する！

アカリン歌うまいからな！

モモもケイも応援してるぞ！

モモ え、

モモとケイ、目配せする。

モモ うん、頑張って！

ケイ が、頑張って！

アカリ ……さよなら。

ヤナギ 大丈夫。アカリちゃんなら絶対成功するよ。

さあ、行こう。

キレイな服を買わないとな。

アカリ はい、

ヤナギ じゃあねみんな。

まったねー。

ミーコ まったねー。

ヤナギとミーコ、アカリ、去る。

モモ よかったの、ハルちゃん？

もうアカリちゃんと会えないかもしれないよ。

ハル うん、知ってる。

モモ ……。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

三人 ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ミーコが語る。

みんなは去っている。

ミーコ アカリちゃんは街に行つて歌を披露しました。

街の人たちは珍しがってアカリちゃんの周りに

集まりました。

それ以来、アカリちゃんが歌うと、  
たくさんの人が集まるようになりました。

パパは、

今度はケイという男のところに行くことにしました。

ケイとヤナギがいる。

ケイ なななんの用だ。

ヤナギ キミは誤解をしていると思うんだ。

ケイ ごっこ誤解？

ヤナギ 俺は敵じゃない。味方なんだよ。

ケイ みみ味方？

ヤナギ 俺は、どうやってたら世界中の人が幸せになれるかを

ずっと考えているんだ。

ケイ うううウソだ。

ヤナギ ケイ、キミはその喋り方のせいで、

ずっと友達もできず、恋人もできたことがない。

そうだね？

ケイ な、な、なんで、

ヤナギ 俺はなんでも知っているんだ。

ケイ ばばバカにしにきたのか？

ヤナギ 俺は味方だって言っただろう。

実はキミにぴったりりの女を知っているんだ。

ケイ え？

ヤナギ 街にいる女なんだが、

実にかわいらしくて優しい女だ。

ケイ それそんやつはおお俺をすす好きにはなならない。  
ヤナギ ところが、

なにげなくキミのことを話したら、

キミの見た目も、性格も、声も、

そしてその喋り方さえも、

なにもかもそのコのタイプだったんだよ。

ケイ うううウソだ。

ヤナギ 一度会ってみるか？

そうすればウソかどうかわかるはずだ。

ケイ ……。

ヤナギ そのコはキミと結婚したいとまで言ってくれているんだ。

ケイ け、けけ結婚。

ヤナギ そうだ。

ケイ け、けけ結婚。

今まで考えられなかっただろう。

キミと結婚してくれる女がいるなんて。

ケイ け、けけ結婚か。

ヤナギ ただ、たったひとつだけ問題があるんだ。

ケイ なな、なんだ。

ヤナギ そのコの家は貧乏でね、

結婚式を挙げて、子供も産んで、

家族で生活していくとなると、

どうしても必要になってくるんだよ。

金が。

ケイ か、かか金……。

ヤナギ 金のない人とは、

どうしたって結婚できないんだ。

ケイ (泣くのをこらえながら) ……かか帰ってくれ。

ヤナギ 待ってくれよ。

言ったじゃないか、俺はキミの味方だって。

ケイ ……？

ヤナギ キミは金さえあれば結婚して、幸せになれるんだ。

俺に、手助けさせてくれ。

ケイ、ヤナギを見つめている。

ヤナギ キミに金をあげよう。

俺にとっては簡単なことだ。

ケイ ほほほ本当か？

ヤナギ ああ、本当だ。

ケイ なななにを企んでいる。

ヤナギ キミの幸せを企んでいるんだよ。

キミが幸せなら俺も幸せだ。

さっそくそのコと会ってみるかい？

ケイ ああ会ってみるだけだ。

ヤナギ ああ、必ず氣にいますよ。

さあ、行こう。

ミーコ こうして、ケイは街の女と会いました。

女は本当にかわいらしく優しいコで、

すぐに結婚が決まりました。

パパは、

最後にモモという女のところに行くことになりました。

舞台にはモモがいる。

ヤナギ キミは絵本を描くために家を飛び出したんだってね。

モモ まあ。

ヤナギ キミの気持ちはよくわかるよ。

俺も昔、画家を目指していたんだ。

でも俺の家は貧乏で、

それを許してもらえなかった。

だから、キミには俺と同じ思いをしてほしくないんだ

よ。

モモ ……。

ヤナギ 街に有名な絵本作家がいてね、

その人のところで勉強してみないか？

お金は大丈夫、おじさんがなんとかするよ。

モモ 私は、絵本作家になんてならなくていいんです。

ヤナギ え？ なにを言ってるんだ。

またとないチャンスだぞ。

夢を叶えるんだよ。

モモ 私も前まで思っていました。

将来は絵本作家になって、

みんなに褒められて、

楽しく暮らすんだって。

でも、私はもう、いまの暮らしで十分楽しいんです。



幸せなんです。

ヤナギ キミは誤解している。

キミは夢が叶ったときの幸せを知らないんだ。

こんなみじめな生活をして十分幸せだなんて

それは才能のない人が言うことだよ。

キミは違う。

才能があるんだよ。

モモ わかっています。

私には才能なんてありません。

ヤナギ なにを言ってるんだ。

もっと自分を信じるんだよ。

モモ それに、私がここを離れたら、

ハルちゃんがひとりになっちゃいますから。

ハルちゃんと一緒にいられば、

私、幸せなんです。

ヤナギ わかってないなあ。

そんなの本当の幸せじゃないよ。

これがあればキミの人生は変わるんだよ。(金を渡す)

モモ (金を捨てて) 友達は裏切れません。

ヤナギ ……キミはバカだよ。大バカだ。

モモ バカなんです。失礼します。

モモ、去っていく。

ヤナギ (去っていくモモに) 金があればあんな友達100人は

手に入るんだぞ！

この大バカが！

音楽。

5

河原。

ユウタとハルがやってくる。

ユウタはスケッチブックを持っている。

ユウタ この辺にしようか。

ハル いいぞ。

ユウタはスケッチブックを開く。

ハルはポージング。

ユウタ、ハルの絵を描いていく。

ハル、すぐに疲れてポージングをやめてしまう。

ユウタ ハルちゃん。

ハル 疲れた。

ユウタ それじゃあ絵が描けないよ。

ハル しょうがない。

ハル、またさっきと同じポージング。

ユウタ ……ハルちゃん、僕にはやっぱり

他の人には見えないものが見えるんだと思うんだ。

うまく言えないんだけど、

奥に隠されたきれいなものっていうのかな。

ハル なにそれ？

ユウタ ほかの人にはハルちゃんが汚く見えるかもしれない。

だけど、僕の目には、はっきりと

ハルちゃんのきれいさが見えるんだ。

たとえとかじゃなくてね、

本当にきれいにみえるんだ。

ハル ふーん、そうか！

ユウタ うん。ハルちゃんはきれいだ。

ハル ……なあ、ユウタはどこにも行かない？

ユウタ どうして？

ハル アカリン、どっか行っちゃった。

ケイも。

モモはいるけどな。

ユウタ 僕はどこにもいかないよ。

ずっとハルちゃんの隣にいる。

ハル うん、よかった。

ユウタ うん。

アカリがやってくる。

昔よりキレイな服を着ている。

アカリ ただいま。

こんにちは、ユウタさん。

ユウタ アカリちゃん。

ハル アカリン！

ハル、アカリに抱きつこうとする。

アカリ、よける。

アカリ ごめん、においうつるから。

ハル ……だな！

アカリ、ハルを見る。笑う。

アカリ ははは……、ははははは、

ハルも一緒に笑う。

アカリ 飽きられた。

やっぱり才能なかったんだ、私。

ハル そっか。

アカリ ……幸せそうだね、ユウタさんと一緒にいて。

ハル あたしは幸せだぞ。

ユウタ ……。

ハル おかえり。

アカリ バイバイ。

アカリ、去ろうとする。

ユウタ アカリちゃん。

アカリ あ、ユウタさん、

今日からユウタさんのお宅におジャマします。

ユウタ え？

アカリ よろしくお願いしまーす。

アカリ、去る。

ユウタ なんか……、アカリちゃん、感じ変わったね。

ハル、アカリの去った方をずっと見ている。

ユウタ、ハルを見ている。

ハル ユウタ、あたしもっとアカリンと話してくるな！

ユウタ あ、うん。

ハル、去る。

ユウタはスケッチブックを床に投げるように置く。

ヤナギ家。

ミーコが現れる。マスクやら手袋やらで完全防備。

ミーコは部屋中に霧吹きで水をまいている。

ユウタ ミーコなにしてんの？

ミーコ、ひたすら霧吹きでまいている。

ユウタにもかける。

ユウタ な、なんだよ。

ヤナギが現れる。

ヤナギ ただいま。

ユウタ ……お帰り。

ミーコ、ヤナギにひたすら霧吹きをかける。

ヤナギ うわ、なんだミーコ、

どうしてそんなに父さんをシュッシュユするんだ。

ほらほらやめて。

どうしたのその格好は。

こんな手袋して。

ヤナギ、ミーコの手袋を脱がす。

ミーコ あ、あ……、

ヤナギ ほらミーコちゃん、おかえりは？

ヤナギ、ミーコの手を触る。

ミーコ きいやああ——！

ミーコ、ヤナギから逃げる。  
自分の手に水をかける。

ミーコ けがれちやう、けがれちやうよお……！！  
ヤナギ どうしちゃったのミーコちゃん？

反抗期？

ミーコ ミーコ見ちゃったの、

夜トイレに行こうしたら変な物音が聞こえて、  
怖かったけど、パパの部屋を覗いたの。

そしたら、ベッドの上にアカリちゃんもいて、

ユウタ (ヤナギを見る)

ヤナギ 違うよミーコちゃん。

人助けなんだよ。

かわいそうなアカリちゃんに、

ぬくもりを分け与えていたんだよ。

ユウタ そんなだから母さんに逃げられたんだよ。

ヤナギ ……あ？

ユウタ そんなだから母さんに逃げられたんだよ！

ヤナギ、ユウタを倒す。

ミーコ きゃ！

しばらく無言のままユウタを見ている。

ユウタ ……なんだよ、  
ヤナギ ……あ、そういえばこの前

ユウタくんのスケッチブック見たんだ。  
いやあ、びっくりしちゃったよ。  
ハルちゃんの裸が描いてあるなんてね。

ミーコ、ユウタを見る。

ユウタ 勝手に見てんじゃねえよ。  
ヤナギ なんだお前。

あの女脱がせたのか？

ユウタ イメージで描いたんだよ。

ヤナギ それでどうしたの？

興奮したのかな？

てめえも十分けがれてんじゃねえかよ。

ミーコ や、や、や……、

ユウタ ミーコ、違うよ、興奮なんかしてないよ。

ミーコ 近寄らないで、けがれる。あ、あ、あ……、

ミーコ、逃げるように去る。

ユウタ ミーコ違うよ、芸術なんだよ！

ヤナギ お前自分の目が特別だとか言ってたよな？

お前だけに見える世界？

そんなもんあるわけねえだろ。

てめえの目はただの欠陥なんだよ。

ユウタ 俺には俺にしか見えない世界があるんだよ！

俺にしか描けない世界があるんだよ！

そんなんだから母さんに逃げられたんだ！

ユウタは去っていく。

音楽。

ヤナギは妻と一緒にいたときを思い出す。

ハルが、ヤナギの妻・ユミとして、客席に背を向けた状態で現れている。

ユミ ねえあなた。

ヤナギ なんだいユミちゃん。

ユミ 結婚式を思い出してたの。

ヤナギ ああ、盛大な結婚式だったね。

たくさん金をかけたからね。

ユミ あなた、本当の幸せって、なんだと思う。

ヤナギ 幸せっていうのは、お金があるってことさ。

お金があればなんでも手に入る。

ユミ 私のことも、お金で手に入れたのかしら。

ヤナギ ……。

ユミ ユウタも、ミーコも、

お金で手に入れたと思ってるのかしら。

ヤナギ どうしんだよユミちゃん。

ユミ いいえ、なんでもないの。

少しお散歩に行ってくるわ。

ユミは去っていく。

ヤナギ そう言ったきり、

ユミちゃんはもう戻ってこなかった。

ヤナギは去る。

ユウタの部屋。

ユウタがぶつぶつ言いながらやってくる。

ユウタ 欠陥じゃない、特別なんだ……。

欠陥じゃない、特別なんだ……。

こきげんなアカリがやってくる。

ユウタ アカリちゃん？

アカリ どうしたんだよユウタ。

元気ないですよ。

ユウタ ……俺って絵を描く素質ないのかな。

アカリ あるよ！ ありまくるよ！

ユウタにしか描けない世界がありまくるよ！

ユウタ アカリちゃん、なんか楽しそうだね。

アカリ ふふー、はい。

アカリ、ユウタにチョコを渡す。

アカリ これ、おじさんにもらったの。

人生が楽しくなるチョコレート。

本当はほかの人にあげちゃダメだけど、

おじさん、特別にユウタにあげてもいいって言った

よ！

ユウタ そう。

アカリ ねえユウタ、チューしてあげよっか？

ユウタ え、なんで？

アカリ チューしたら楽しいよ。

ユウタ 楽しくないよ。

アカリ なんで？

チュー嬉しくないの？

おじさんはすっごく嬉しそうにしてくれるよ。

ユウタ、真顔でアカリを見る。

アカリ もー、そういう真面目な顔しちゃう。

ユウタももっと楽しく生きようよ。

ユウタ、首を横に振る。

アカリ なんでー？こんなに楽しいのに。

ユウタ 無理だよ。世の中悲しいことが多すぎるんだ……。

アカリ そんなことない。生きてるって楽しいことだぞ！

魔法の歌うたってあげるよ。

♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

ユウタ 魔法なんてないよ。

アカリ ねえ、あたしのチョコ食べてよ。

ユウタ、食べる。

ユウタも陽気になってくる。

アカリ なあ？ 人生楽しいだろ？

ユウタ うん、楽しい！ なんか楽しくなってきた！

アカリ 生きるって楽しく！

ユウタ 楽しく！

アカリとユウタ、笑い続ける。

笑いながら去っていく。

街。

ケイが歩いてくる。

風が吹いてきたようで、少し震える。

ひとりごとを言っている。

ケイ ああ、いい匂いがする。

パンの匂いだ。

森にいたときは毎日食べてたなあ。

……結局あの女は金が目当てだったんだ。

金がなくなったらすぐに捨てられた。

裏切りやがった。

風が吹いてきて、震える。

ケイ 俺も裏切り者だ。

女につられて森のみんなを捨ててきた。

もう森には戻れない。

ああ、美術館だ。

ここで風をしのがせてもらおう。

パンが懐かしいなあ……。

ケイは去っていく。

6

河原。

食。パンを食べているハルとモモ。

ハルはうろろう歩いている。

ハル 遅いなあユウタ。

モモ 今日も来るって言ったのにね。

ハル 今日もあたしの絵を描いてもらうんだ。

ユウタはあたしのことほめてくれるからな。

モモ 嬉しそうだね。

ハル まあな。

遠くから声が聞こえる。

ユウタの声 ハルちゃん！

ハル 来た！

アカリの声 ねーえーちゃん！

ハル あ、アカリンもいる！

アカリとユウタがやってくる。二人とも陽気。

アカリ あ、モモさんだ、ちーっす！

ユウタ ちーっす！

モモ あ、うん。

ハル なんか楽しそうだな！

アカリ うん！ 生きてるって楽しいー！

ハル アカリンも生きてるのが楽しいって

思えるようになったんだな！

アカリ うん！ サイコー！

ユウタ サイコー！

モモ 大丈夫？

アカリ だいじょーぶ！

ユウタ だいじょーぶ！

アカリ、笑い出す。ユウタも笑う。

つられてハルも笑う。

ヤナギが現れる。

ヤナギ あ、二人ともこんなところにいたのかー。

さがしたよー。

アカリ やーん、さがされちゃったー。

ヤナギ あっはっは、相変わらず楽しそうだね。

アカリ 超楽しい。

ヤナギ でもそんな楽しい二人に悲しいお知らせ。

あのチヨコ、もうなくなっちゃうんだ。

アカリとユウタ、青ざめる。

ふたりはヤナギに寄る。

アカリ チヨコ、チヨコもうないの？

ヤナギ そう、もうないんだ。

ユウタ チヨコ、チヨコ……。

ヤナギ 大丈夫！ おうちに最後の一個があるよ！

早い者勝ちだ！

最後の一個を手にするのはどっちかな！

アカリとユウタ、走り去る。

ヤナギは座る。

しばらく黙っている。

ヤナギ ……ハルちゃん、

あの二人はもう少ししたら死んでしまうんだ。

モモ え？

ハル ……。

ヤナギ 病気なんだ。

ココロもカラダもボロボロさ……。

最後にはおかしくなってね、

……そのまま死んでしまうんだ。

ハル、少し笑顔になる。

ハル 死んじゃうかー。

ハル、笑顔を残したままうつむく。

モモ どういうことですか……？

ヤナギ (少し笑って) でも落ち込む必要はないんだ。

おじさんはこの病気を治す薬をもってるんだ。

その薬をハルちゃんにあげよう。

ハル ほんとか！ くれよ！

ヤナギ そういうお願いをするときはな、

おでこを地面につけるんだよ。

ハル、しゃがんだままおでこを地面につける。

ヤナギ こうだよ。

ヤナギ、ハルに土下座の姿勢をとらせる。

ヤナギ 「お願いします。薬をください。」って言うんだ。

ハル お願いします。薬をください。



ヤナギ よしわかった。

ハル ほんとか！

ヤナギ うん。でも、タダであげるわけにはいかないな。

ハル じゃあどうしたらくれるんだ！

ヤナギ まずは一日だけハルちゃんのからだを貸してほしいな！

いやー晩！

一晩だけハルちゃんのまたぐらを

貸してくれるだけでいいんだ！

ハル ……。

モモ (かばうようにハルの前に立って、ハルに) ……だめ。

ヤナギ じゃあキミが貸してくれるのかい。

モモ ……。

ハル、ニコっと笑う。

ハル あたしが貸したら薬くれるのか？

ヤナギ うーん、この薬はとても大切なものだからねえ。

それだけじゃあ釣り合わないなあ。

ハル あたしなんでもするよ！

おっさんはアカリンとユウタを救え！

ヤナギ、ニコっと笑う。

ヤナギ ……ハルちゃんの熱意には負けたよ。

ハルちゃんのためにオオマケにマケてあげよう。

ハルちゃん、おじさんの大切な薬と、

ハルちゃんの「大切な腕輪」を交換しよう。

ハル (腕輪を見て) これ？

ヤナギ そう。

ハル、腕輪をじっと見る。

ハル でも、お母さんの腕輪……、

ヤナギ そうかおじさんに腕輪をくれないのか。

じゃあ残念だけど、薬はあげられないなあ。

ハル、もう一度腕輪をじっと見るが、少して、

ハル わかった、

モモ (ハルの腕をつかんで) 待って。

ヤナギ ……どうしたの？ キミも貸してくれるの？

モモ はい、つて言ったら、

薬はもらえるんですか？

ヤナギ、笑う。

ヤナギ なるほど、これが友情か。

ヤナギ、大笑いする。

ヤナギ いらねえよ。汚らしい。

モモ ……。

ヤナギ これでわかったかい？

友情なんてなんの役にも立たないって。

さあ、ハルちゃん。

腕輪、くれるの？ くないの？

モモ ……。

ハル ……しようがない、おじさんにこの腕輪あげる。

ヤナギ 本当かいハルちゃん！

よく決断したよ！

ハル、腕輪をヤナギに渡す。

ヤナギ ありがとう、これでこの腕輪はおじさんのものだ。

ハル 大事にしるよ。

ヤナギ ああ、大事にするよ！

ヤナギ、ハサミを取り出して、腕輪を切り刻む。

ヤナギ あー手がすべった！

ハルちゃんの大事な腕輪が！

あーあ……。

ハル ……。

ヤナギ ♪泣いちやダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

(笑う) 悲しむ必要なんてどこにもないんだよ！

だって、これはなんの金にもならないゴミなんだから！

こんなゴミと薬を交換してくれるなんて、

おじさんとってもいい人だろ？

ハル、しばらく切り刻まれた腕輪を見ているが、  
やや笑顔になって、

ハル いい人。

モモ、切り刻まれた腕輪を拾い集め始める。

ヤナギ さ、約束の薬だ！

これを飲ませて救ってあげるんだぞ！

ハル うん！

ヤナギ あ、

ヤナギ、ニヤッと笑う。

ヤナギ そうだ、おじさん大事なことを言い忘れていたよ。

おじさん、その薬は一人分しか持っていないんだ。

ハル ……。

ヤナギ だから、アカリちゃんとユウタ、

どっちか一人しか助けてあげられないんだ。

ハル ……。

ヤナギ どっちを助けるかはハルちゃんが決めるといいよ。

ハル ……。

ヤナギ ハルちゃん、これが人生さ。

何かを得るためには何かを捨てなければいけない。

誰かの幸せのために

誰かが犠牲にならなければいけないんだ。  
わかるかい？

ヤナギ、モモが集めた腕輪のかけらを奪って、  
地面に落として踏みつける。

ヤナギ こんなものは、人生でなんの役にも立たない。  
ハル ……。

ヤナギ、笑う。

ヤナギ タイムリミットは3日間。

それを過ぎたらどっちも死んじゃうよ。

さあ、どっちを殺すか選ぶんだ。

アカリちゃんとユウタ、

ハルちゃんはどうっちを殺すのかなあ？

ヤナギ、笑いながら去る。

モモ、しゃがんで悔し涙を流す。

モモ ごめんね、なんの役にも立たなくて……。

ハル ♪泣いちゃダメさ いつも笑って 楽しく生きよう

モモ 無理だよ。

ハル ……なあ、モモだったらどっちを選ぶ？

アカリンとユウタ。

モモ ……。

ハル ……海。

モモ え？

ハル 海、行くぞ！

ハル、モモを連れて去っていく。

ヤナギの家。

ヤナギが帰ってくる。

ヤナギ ただいまー。

まったく、誰もいないのか。

ミーコがクッキーを持って後ろから現れる。

手袋とマスクをしている。

ミーコ おかえりパパ。

ヤナギ おお、ミーコちゃん。

ただいまあ。

ミーコ この前は汚いなんて言っでごめんなさい。  
やっぱりミーコはパパが大好きなんだ。

ヤナギ ああ、そうかい。

ミーコ うん。

ヤナギ ミーコちゃん、

もし自分の家族と、自分の好きな人、  
どちらかひとつしか選べないとしたら、

どっちを選ぶ。

ミーコ ミーコは、パパを選ぶよ。

ヤナギ じゃあ、ハルちゃんはどうかかな？

ミーコ どうかかなあ？

ヤナギ パパはその答えが楽しみで仕方がないんだ。

ハルちゃんが、どっちを殺すのか。

そうだな、パパは、

ハルちゃんはきつと家族を殺すと思うな。

やっぱり好きな人にはかなわないよ。

まあ、どっちにしるハルちゃんは人殺しだけどね。

ミーコ ねえ。パパ、

ミーコ、愛情たっぷりのクッキー焼いたの！

大好きな。パパに食べてほしいな！

ヤナギ ああ、ありがとう。

パパとっても嬉しいよ。

ヤナギ、クッキーを二つに割る。

ヤナギ 半分こだ。

ヤナギ、ミーコに半分渡す。

ヤナギ さあミーコ、一緒に食べよう。

ミーコ ミーコは食べないんだ。

ヤナギ どうして？一緒に食べたほうがおいしいよ。

ミーコ ダイエット中なんだ。

ヤナギ へえ、このクッキー何が入ってるのかなあ。

ミーコ ……愛情！

ヤナギ じゃあ、もったいなくて食べれないな。

ヤナギ、クッキーを返す。

ヤナギ ミーコ？ パパのこと殺そうとしたな？

ミーコ してないよ！

ミーコのマスクやら手袋やらをとって、ミーコにべたべた触る。

ヤナギ まあ、ミーコ。

パパは死んでほしいくらい汚いか？

ミーコ やだ、やだ、けがれる、けがれる、

ヤナギ ミーコちゃん、いいこと教えてあげる。

ミーコちゃんの身体に流れている血はね、  
半分はパパの血なんだ。わかる？

ミーコちゃんは、生まれた時からけがれてるんだよ。

ミーコちゃんの半分はパパなんだからね！

ミーコ ああ、ああ、ああ……、

ミーコ、逃げようとする。

ヤナギ 逃げられないよ。

どんなにがんばったって

自分のからだからは逃げられないよ！

ミーコ あああ……、

ミーコ、去る。

ヤナギ ああ……人生って楽しいなあ！（クッキーを叩きつける）

### 第三幕

7

浜辺。

ハルが背中をむけて立っている。

モモが語り始める。

モモ ハルちゃんはずっと浜辺に立っていました。

夜が来ても、朝が来ても、

ずっと立っていました。

夜が来て、朝が来て、

夜が来て、朝が来て、

夜が来て、朝が来て、

……ハルちゃんは、ずっと眠らず、

一言もしゃべりませんでした。

ハル、ずっと立っている。

モモ ハルちゃん、

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

## あとがき

この台本は2013年に上演した『汚姉妹』をリメイクしたものです。この作品が「劇団アトリエ」の最後の作品です。本当はもっと楽しく開放感のある作品を選んだ方がよかったですんじゃないかとも思ったのですが、タイトルも「おしまい」だし、この作品で終わりにするのも、この劇団らしくてよかったかなとも思います。

昔書いた作品をリメイクするにあたって、当時の台本を読み返したのですが、「当時の僕は、いったい誰に何の恨みがあつてこんなひどい話を書いたんだろう？」と首をかしげました。当時のことを思い出しても、別に誰かを恨んでいた記憶も、病んでいたような記憶もありません。ただひとつ、なにか行き詰まっていた感覚はあつたような気がしました。作品を作っているなにかうまくいかない。あまり評価されない。お客さんも集まらない。そういった不安を打開したくて書いた作品だったのかもしれない。「ダークな絵本」というコンセプトでしたが、最初の構想では、ラストは主人公のハルちゃんを夜空に星を降らせて、敵も味方も祝福するという希望のある明るい話をイメージをしていた気がするのですが、当時の僕は「明るい話を書こうと思いましたが、無理でした。」と挫折しました。

リメイクにあたって、前半にモモとケイ（初演時は違う名前、キャラも性別も違いました）が仲間になる、というシーンが描かれました。見ての通り「友達」がメチャクチャ連発されています。僕の台本でこんなにも「友達」という言葉が出てきた作品はありません。書いていて、「自分の書いた台本じゃないみたいだ」と狂いそうになるほど抵抗がありました。

さて、人間の価値観はどこからやってくるんだろうか、というのが最近の興味です。どんな家庭に生まれたのか、どんな環境で育ってきたのか、どんな経験をしたのか、どんな人と出会ったのか、そういういろいろなものが関係して、価値観は作られていきます。この価値観というものは、自分で作っ

てきたものだ、という気がしてしまいがちですが、本当は外部のいろんなものによって形成されてきた価値観を、ただ受け入れている、というだけなんじゃないかと思えます。つまり、一見、自分は自分で価値観をコントロールして選んでいる、というように見えるかもしれませんが、実際は、価値観に自分がコントロールされているんじゃないだろうか、と思います。ある価値観をものすごく強く信じている人間は、ほかの価値観を許容できなかったり、その価値観が崩されたときに、人生の意味を失ってしまうように思います。

「重要なのは愛か？ 金か？」みたいな議論があつたりしますが、当然、どっちもあるのが一番いいですよ。裏を返せば、別に金のために愛を捨てる必要もないだろうし、愛のために金を捨てる必要もないはずです。

ところが、どうしても金持ちになれなかったり、誰かに愛されると思えなかったりする人間はたくさんいます。そういう人間が嫉妬でもって「自分は金持ちでないが、そもそも金なんか持っても意味がない。愛さえあればいいんだ。金持ちのやつは哀れだ。」とか、「自分は誰にも愛されていないが、そもそも愛なんか必要ない。金が全てだ。愛が大切とかいつているやつは、現実が見えていない。」とか、自分の現状をなんとか肯定するために、他人を頭の中で蹴落としていくのです。いや、頭の中で思っているだけなら別にどうでもいいのですが、その価値観でもって、実際に周りの人間を攻撃する人間がいて、迷惑な話だと思えます。

そういった、恨みや嫉妬でつくりあげた「否定の価値観」は、人を幸せにしないかもしれません。否定を使わずに、なにかを肯定できるような「肯定の価値観」を持てる、幸せになれるかもしれません。「金持ちは金持ちで幸せかもしれないけれど、お金がなくても自分は幸せだなあ。」他人を蹴落とすんじゃない、ただ自分を肯定する。そのくらいでいいのかもしれない。

2016年9月14日（水） 小佐部 明広

《上演記録》

劇団アトリエ第21回公演『汚姉妹・呪われた少女』

【キャスト】

ハル 山木真綾 (劇団アトリエ)  
アカリ 脇田唯 (POST)  
モモ 塚本奈緒美  
ケイ 熊谷嶺 (霊6)  
ヤナギ 伊達昌俊 (劇団アトリエ)  
ユウタ 有田哲 (劇団アトリエ)  
ミッコ 小川しおり (劇団 Fireworks)

【スタッフ】

演出・脚本 小佐部明広 (劇団アトリエ)  
舞台 米沢春花 (劇団 Fireworks)  
照明 山本雄飛 (劇団・木製ボイジャー14号)  
音楽 Saki  
音響 小佐部明広  
衣装 佐々木青  
小道具 佐藤智子 (ゆりいか演劇塾)  
宣伝美術 八十嶋悠介 (TBGZ/マイペース)  
制作 丹野早紀  
後藤夏実

【日程】

2016年12月14日 (水) 20時

15日 (木) 20時  
16日 (金) 15時 / 20時  
17日 (土) 14時 / 19時  
18日 (日) 13時 / 17時

【会場】

扇谷記念スタジオシアターZOO

【料金】

(前売) 一般 2000円  
25歳以下 1500円  
高校生以下 500円  
(当日) 500円増 / 再観1000円

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

2016年12月12日 第1刷制作  
2017年10月4日 第2刷制作

《『汚姉妹・呪われた少女』の上演について》

「一般前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の  
場合は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の  
3%程度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画  
運営委員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com